

ふわふわの古風な愛

松本侑壬子・ジャーナリスト

タイトルどおり、ふわわりほのぼの、フツウの中年女性の夢々しいロマンチック・コメディである。元哲学教授、劇作家で小説家でもあるシュミット監督の実体験に基づく映画化で、おしゃれでファンタジックな恋の知恵がいっぱい。

オデット（カトリヌ・フロ）は、美容師の息子と生意気盛りの娘との3人暮らし。さらに、娘のグータラなボーイフレンドまで同居している。夫に先立たれ、昼間は百貨店の化粧品売り場で働き、夜は舞台衣装の羽飾りを作る内職をして一家を支えている。狭いアパートでの決して豊かな生活ではないが、明るく居心地がよいのは、一家の中心オデット・ママの人柄である。きれいなものが好き、歌が好き、夢を見るのが好き、とりわけ好きなのが恋愛小説。読むうちに体が自然に宙に浮き上がるほど。

毎晩、寝る前に大好きな作家バルタザール・バルサン（アルベール・デュポンテル）の小説を読むのが日課だ。大甘のラブ・ロマンスで、人によっては「あり得ない！」などと軽蔑するムキもあるが、オデットは読むとたちまち体中に幸福感が湧き上がり、夢の世界へと浮遊できるのだ。ある日、あこがれの作家バルタザールのサイン会にうきうきと着飾って出かけるが、作家の前では上がってしまって何も言えず、思いを伝えることができなかった。一度はがっくりするが、立ち直りも早い。別の日にまたサイン会があると聞き、今度は必ず！と、あらかじめ自分の思いを手紙に書いて持参、首尾よくバルタザールにファンレターを手渡すことができた。もう、それだけで満足。天に

も昇る思いのオデット。

一方、バルタザールは、自分の最新作をテレビの書評番組でミーハーの女性しか読まない、文学以前の低俗な本だと酷評され、自分の不安に図星を指された思いで大ショック。おまけにその文芸評論家と自分の妻が浮気をしている事実を知るに及んで、厭世観から自殺を図るほどにすっかり落ち込んでしまう。そんなとき、ふとあの“ミーハーな女性ファン”がくれた手紙を開けてみると…。

秘かに軽んじていたファンレターだったが、その中身には、オデットがどんなに自分の書いた小説を楽しみ、励まされ、生きる糧にしているかと、尊敬と感謝の言葉が心を込めて綴られていた。こんなときに地獄に仏！と、バルタザールはオデットの元を訪れ、少しの間、ここに置いてくれないか、と頼み込む。オデットは驚きながら作家の窮状を聞き、申し出を快諾する。いや、快諾どころか、内心有頂天のオデットは、憧れの人を迎えて、つい体が浮遊してしまうのだ。そんなオデットに次第に本気で惹かれ始めるバルタザール。

だが、そうやすやすとはハッピーエンドに至らない。憧れと恋愛とは違うと考えるオデットの価値観。次々と相手を変える同性愛者の息子や成り行きで腐れ縁が切れない娘の生き方には口を挟まぬ母親だが、オデット自身は、頑固なまでに“古風な”自説を曲げない。かっこよくてインテリで有名人の憧れの人々の求愛を断るなどと、自分自身想像もしなかったはず。だが…。

一ひねりした中年ロマンス。地上5センチどころか天まで昇るオデットの特撮が楽しい。



仏ベルギー合作映画（100分）／エリック＝エマニュエル・シュミット監督

『地上5センチの恋心』

3月1日（土）からシネスイッチ銀座ほかロードショー

